
夕暮れの時計屋

TAK-UYA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕暮れの時計屋

【Nコード】

N1987F

【作者名】

TAKUYA

【あらすじ】

とある町にケイジ、コバ、広太という中学生が住んでいた。ある日、ケイジの時計が壊れてしまった。3人は修理に出すためにある時計屋に向かった。しかし、そこは今にも崩れそうなボロ家だった。そこで3人を待ち受けているものとは？そして、ケイジの時計は無事に修理に出せるのだろうか？

1・壊れた時計

1・夕暮れの街

ここは、のんびりとした町、花咲町。

今はもう夕方。空は真っ赤だ。

カラスが鳴き、小学生が縦笛を吹きながら帰っていく。

「ピー、ピー…どうだすげーだろ！」

「なに言っただよ、僕の方がすごいもんね。」なんて言いながら

さて、ここに花咲第一中学校という学校がある。この物語はこの3人の中学生が繰り広げる、とてもゆかいな物語 -

ガツシャーン！窓が割れる音、そして先生の怒鳴り声。

「水嶋ー！またお前かー何度言ったらわかるんだ！校内でサッカー

ボールを蹴るなー！！！」

この先生は森高知良もりたか かずよし

少し太っていて生徒からは、ぼっちゃり森高というあだ名で呼ばれている。

そして、そのぼっちゃり森高にこっぴどく叱られたのは、花咲第一
中学2年A組みずしま 水嶋慶治けいじ。

みんなからは、ケイジと呼ばれている。ケイジは昔からサッカーが大好きで暇さえあればボールを蹴っていた。

スポーツ万能だが勉強はまるで駄目。

性格は明るく、クラスのムードメーカー的存在。

「今度からは気をつけるよ！」

「はい、すいませんでした。」

ケイジがやっと森高から解放されて教室へ戻ろうとすると2人の男

生徒が笑いながらこつちを見ていた。「ケイジー君、また森高に怒られてたね、ププツ」

そう言っただけケイジのことをバカにしているのは同じクラスで親友の

こはやかわ ひろき

小早川弘毅

ケイジと同じサッカー部でエースだ。

成績も学年でトップクラス、何事にも冷静でクールなケイジとは正反対の性格だ。みんなからはコバと呼ばれている。

そして、その光景をにっこりしながら見ているのは2年C組の牧広太まき こうたケイジとコバとは幼稚園からの仲良しトリオ。

部活は柔道部で初段の持ち主。

だが、その体格とは反対に心優しく、いつでも笑っている。広太は特にあだ名はない、本人はそれが一番の悩みらしい。

さて、こうして揃った3人を待ち受けついる壮大な物語はある些細な出来事によって始まるのである。

ある日のこと、学校も終わった放課後。

ケイジら3人は家が近いので毎日一緒に帰っている。

今日もくだらない話をしながら歩いていく。

そんな中、珍しくケイジ口数が少ないことにコバが気づいた。

「どうしたケイジ？なんか元気ねーけど」

「べ、別に な、なんでもねーよ」

広太が口をはさむ、

「悩み事でもあんの？」

「悩みって言うか、困り事って言うか」

「もう、いいから言えっば！」

「わかったよ！言うよ、と とけい……」

「はっ！？なんて??」

「と……時計が壊れちゃったんだよ！」

ケイジが大きな声で困り事を発表すると2人は、

「え そんなことかよー心配して損したわ！」

「そ そんなことってなんだよ、俺があの時計をどんだけ大切にしていたか、お前らだって知ってるだろ」

ケイジの突然の怒鳴り声に2人はビクツとした。

「わっわかった！わかったから落ち着けて」

2人は暴れかけたケイジをなんとか抑えた。

「はあ、はあ…ごめん、なんか時計が壊れたことに焦っちゃって、それでお前らに八つ当たりしちゃって…ごめん」

ケイジがあやまる。

「いや、俺の方こそ笑っちゃったりして、ごめんな」

コバがあやまる。

「はあ、でもどうしよう時計…」

ケイジが座り込む。

そこに広太がニコニコして来て、ケイジの肩をポンと叩く、

「時計は壊れちゃったけどさ、修理すればいいんじゃないの」

ケイジが目を丸くした。

「…あつその手があつた」

「はあ…遅えよバーカア」

コバが呆れた顔で言う。それに対してケイジがキレる、

「ああ？じゃあお前は最初から気づいてたんかい！それならもっと早くから言えやボケ！カス！アホンダラ！ボケ！カス！アホンダラ

！ボ…」

広太が急いで止めに入る、

「もう！ケンカしてる場合じゃないって、早く修理に出さない」と

「そ、そうだな早く修理に出さねえとな」

「ああ、そうだな、で、広太？時計屋つてどこにあんの？」

コバが聞く、それに対して広太が答える。

「ここだよ。」

広太が指差したのは、なんと3人の真ん前にある古びた家だった。さすがに真に受けないコバは、

「バツカじゃねえの、違うに決まってんじゃない、怪しいから入んなよ、そんなところ」

広太が言う、

「あの…もう入っちゃったんですけどケイジ」

「はあ〜！っもうあのクソあほっ！…おい広太、俺たちも行くぞ！」
「もー待ってよ〜」

こうして、ケイジ、コバ、広太の3人は謎の時計屋の中へと入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987f/>

夕暮れの時計屋

2010年11月24日16時08分発行